



新 年 の ご 挨 拶 — 1991 年 —

森 田 善 一 郎*

会員の皆様、明けましておめでとうございます。

皆様方それぞれにいろいろな感慨のうちに新年をお迎えになり、心新たに新しい年の活動を始められたことと存じます。

昨 1990 年はまさに激動の年でありました。国外では、ソ連のベレストロイカに端を発した東欧諸国の民主化、東西両ドイツの統合に代表される世界の緊張緩和と融和という歴史的にも特筆されるべき、また祝福されるべき時代の流れの中で、突如として起こったイラクのクウェート侵攻に帰因するいわゆる湾岸危機に世界各国が振り回されたことは、きわめて遺憾なことでありました。一方、国内でも、政治、経済ともにいろいろな局面がありましたが、その中で、粗鋼生産量が 1 億 t を超す高い水準を保つことができましたことは、まことに喜ばしいことでありました。

日本鉄鋼協会は、昨年、創立 75 周年の節目を迎え、春季講演大会時に祝賀記念行事を挙行いたしました。またこれを機に本協会事務局の機構改革を行い、また 10 月には第 6 回鉄鋼科学技術国際会議 (IISC) を名古屋で開催いたしました。この会議は、1970 年東京ではじめて開催された鉄鋼の科学と技術に関する国際会議 (ICSTIS) に端を発し、その後 4 年ごとに Düsseldorf (第 2 回、西ドイツ)、Chicago (第 3 回、アメリカ)、London (第 4 回、イギリス)、Washington D. C. (第 5 回、アメリカ) で開催されてきた大規模の国際会議で、今回で第 6 回にあたります。この会議には国内外から 900 名を超える参加者があり、6 日間の会期中に 372 件の学術研究発表と討論が盛大かつ円滑に行われ、参加者に深い感銘を与えました。この会議の成功は、八木靖浩本会前会長を委員長とする組織委員会委員の方々、名古屋地区の関係者の方々ならびに本協会事務局の格別のご尽力によるもので、ここに本紙面をかり改めて厚くお礼申しあげるしだいです。この会議も、第 1 回会議以来 20 年の歳月の経過の中で立派にその役割を果たしたということで今回の第 6 回会議でもって発展的にその幕を閉じ、今後は専門分野ごとの国際会議に引き継がれることになりました。

本会の主要行事の一つで会員の研鑽の場である春秋の講演大会では、海外からの参加者を含めて多くの新しい研究成果が発表され、また本会の機関誌である「鉄と鋼」ならびに「ISIJ International」の刊行も順調に行われ、それらの内容も充実し、国内外から高い評価が得られております。従来、両誌に掲載されたすぐれた学術論文に対し「俵論文賞」が翌年の春季講演大会時に授与されておりましたが、昨年からは新たに「澤村論文賞」が設けられ、俵論文賞は「鉄と鋼」誌の、また澤村論文賞は「ISIJ International」誌の優秀論文に対してそれぞれ秋季講演大会時に授与されることになり、昨年は俵論文賞は 5 件の論文に対し、また澤村論文賞は 3 件の論文に対し授与されました。これを機に両誌の論文のいっそうの質的向上を期待するしだいです。一方、共同研究会、特定基礎研究会、鉄鋼基礎共同研究会

* 本会会長 大阪大学工学部教授

でも従来どおり活発な研究活動が行われ、我が国鉄鋼産業ならびにそれを支える学術の発展に大きな貢献をしております。

さて年も改まり新しい世紀を迎えるまであと9年、まさに我々は今20世紀の世紀末にいます。ところでこの「世紀末」という言葉は、普通はあまり良い印象の言葉として使われていないようですが、今から100年ほど前の19世紀末の世の中ははたしていかがであったでしょうか。当時我が国では、内閣制度が創設され森有礼が初代文部大臣に就任し(1885年)、博士の学位令が發布(1887年)、1889年には憲法が發布され、1890年には第1回の衆議院総選挙が行われています。また学術の分野でも、北里柴三郎の破傷風血清療法の発見(1890年)や志賀潔の赤痢菌の発見(1897年)など輝かしい成果が見受けられます。当時日本ではこのように近代国家建設へ向けての必死の努力が続けられていたわけですが、このような中で1894年には日清戦争に突入し、このことがその後大太平洋戦争へ向けて我が国が辿った不幸な軌跡と無関係でないことを考えますと、前世紀末はやはり良き世紀末であったとはいえないようです。しかし当時の世界に目を転じますと、我々が関連する鉄鋼の学術の分野では、転炉製鋼法の発明(1856年)、産業革命を経て鋼の大量生産時代に入り、近代文明の幕明けを迎えていました。すなわち鉄鋼の分野に限ってみると、19世紀の世紀末はたいへん意義深い重要な節目であったと申せましょう。我々もあとわずかとなった20世紀末を大切に、鉄鋼技術史の上でも19世紀末に劣らない素晴らしい世紀末にしたいものです。

昨春、私は本会会長就任に際し、来るべき21世紀も地球規模の視野に立てば実質的には「鉄の時代」であるとの認識のもとに、鉄鋼の新技术を生み出すための基礎ならびに応用研究が今後ますます重要となり、それはまた優秀な人材無しには成就し得ないであろうことを強調いたしました¹⁾。そしてその人材を教育、育成すべき我が国の大学における鉄鋼の研究と教育がまさに危機に直面している一つまり良くない意味での世紀末の状態にあることを訴えました¹⁾。日本鉄鋼協会でも八木前会長時代にすでにこの問題が取り上げられ、種々討議を重ねてまいりましたが、このほど漸く鉄鋼企業各社のご理解とご支援のもとに、大学における鉄鋼基礎ならびに応用研究の助成のための「鉄鋼研究振興資金」が設けられることになりました。これにより、近い将来、我が国の大学における鉄鋼分野の研究がさらに進展し、ひいてはすぐれた人材の教育と育成に役立ち、さらに我が国の鉄鋼産業界ならびに関連学界にもその波及効果のあらわれることを期待するとともに、これが鉄鋼界にとって良き世紀末への試金石となることを念願しているしだいです。

以上、年頭にあたり、昨年1年間の協会活動の中での特筆事項を回顧するとともに、所見の一端を述べさせていただきます。

最後になりましたが、新しい年が会員の皆様方ならびに日本鉄鋼協会にとって意義のある、より良い年でありますようお願い申し上げますとともに、日本鉄鋼産業ならびにそれを支える学術のさらなる発展のため、会員の皆様のいっそうのご努力とご協力をお願いし新年のご挨拶といたします。

1) 森田善一郎: 鉄と鋼, 76 (1990) 6, p. i